

軍人と言うと語弊があるが、武力組織に籍を置き、現代戦を戦わざるを得ない人間は本来は非情なまでに合理的・科学的でなければならぬと今まで固く信じてきた。然しながら、平成 17 年は何となく小生にとっては気になる年であり、災難が降りかかってくる訳ではないが何となく不安を感じる年である。具体的にどうこうと言う訳ではないが、漠とした不安、その様な心意現象を感じるのが厄と言うものかも知れない。



考えてみれば、前厄である。男の厄年は、25 歳、42 歳、61 歳であり、その前後の年齢を「前厄」「後厄」と言う。厄年は、数え年で行う。昭和 21 年生まれは今年、平成 17 年が前厄である。

(男の 42 歳と女の 33 歳を大厄とするのが一般であり、前厄・本厄・後厄といって前後 3 年間も続くというのである。これは 33 が〈さんざん〉、42 が〈死に〉に通ずるところから近世あたりにはじまったといわれている。)

「厄年」の「やく」とは、神祭りを行う「神役」の「役」のことでもあると言われる。その役を行うに当たって神様に失礼のないように、飲食や行為を慎み、心身を清浄にするために御祈祷を受けたのが始まりであると考えられる。

一般的には、正月から節分までの時期に神社で厄払いを受けるべきなのだろうが、厄とか法難などと言うことを余り信じない、信心薄い私であったので、今まで厄払いをしていなかったのである。

斯様な次第で、7 月 2 日に野火止氷川神社で厄払いを受けたのである。勿論、神社に向く前にはシャワーを浴びて、齋戒はやや不完全であるが、沐浴は完璧にして家内共々お払いを受けた。神域にあって、お払いを受けたと言うだけで、不思議なもので、清々しくなる。心に平安が訪れたと言うべきか。

野火止氷川神社について

御祭神 : 素戔鳴尊 (スサノオノミコト)

創建 : 江戸時代初期の承応二年 (1653) (伝)

(川越藩主松平信綱公当地開発の年)

本殿 (明治 6 年)、拝殿 (明治 39 年)、幣殿 (大正 14 ねん) 建築、昭和 39 年大改修

末社 : 山積神社

考えてみれば、人間を 60 年もやっていると体調不良も起きるだろうし、また 60 前後と言うのは、私がそうであったように人生の転機にもなる頃合でもある。その様な時には、立ち止まって自分を見直してみるのも必要であろう。厄払いと言うのはそういう意味であろう。

厄年になるとそれを避けるために厄払いや厄よけなどの祈願や呪法を行うのが今尚全国各地で行われている。様々な習俗があるようだ。

以下は百科事典にからの引用である。

『年のはじめに親類や近隣の者を招いて年祝をすとか、神社や寺院に参って厄祓いの

祈願をするのがふつうであるが、自分の年の数だけの銭を紙に包み、道の辻や橋などの境に持って行って捨てたのち、あとを振りかえらずに帰ってくる呪法が広く行われている。厄年は実子や友人にも影響をあたえると考えられた。親の厄年に生まれた子は育ちが悪いというので、箕(み)やたらいの中に入れて川や海に流したり、道の辻に捨てて他人に拾ってもらい、仮の親子関係(親子成り)を結ぶ所は多い。また香川県では厄年に近いときに死んだ者のために、生きておれば厄年にあたる正月に法事をしてやり、それを厄法事といっている。村や町の道の嶋や境などの空間には厄病神がいて、通る人に災いをすると考えられていた新潟県糸魚川市には厄病平(だいら)と呼ぶ所があり、伝染病患者を隔離した建物があった村境だという。魔のさす場所、妖怪の出る空間は厄の発生しやすい所と考えられていたのである。また、厄病神は自由に横行するので、大晦日の夜とか 12 月と 2 月の 8 日、節分などにそれを祭ったり、追い払う行事が行われている。』

当地はどのようなことをするのであろうか。私も当地に居を構えて 10 年になるが、地域の方との交流は全くなかった。新参者を受け入れる土壌があるのかどうかは不明であるが、今までの生活と違う生き方をこれからはしなければならぬ。

追記する機会があることを願おう。

(参考：百科事典、神社資料 etc)